

多摩細胞診研究会会報

編集責任者：笹井 伸哉（国家公務員共済組合連合会 立川病院 / 多摩細胞診研究会副会長）

発行責任者：蛇沢 晶（独立行政法人国立病院機構 東京病院 / 多摩細胞診研究会会長）

平成 25 年 2 月 21 日の朝日新聞の科学に

細胞検査士会学術委員長 小松京子氏の記事が掲載されました。

（探究人）

国際臨床検査技師連盟会長・小松京子さん

世界標準の技術、広めたい

顕微鏡や超音波を駆使して病像を明らかにする検査のプロ、臨床検査技師。健康診断で血液や尿を調べるなど、暮らしに身近な医療従事者だ。昨夏、30カ国16万人以上の技師が加盟する国際臨床検査技師連盟の会長に、アジア人として初めて就任した。来年10月まで務める。「技師のグローバル化」を進める。先進国では生活習慣病の検査が重要だが、途上国ではマラリアの検査が必要になる。どこでも標準的な検査技術を学べるよう、eラーニングの構築に取り組む。「多くの人が国境を越えて動く時代に、検査値がばらばらでは困るでしょう」

人体の不思議にひかれて医療系の専門学校に進んだ。顕微鏡で細胞を観察し、がんになっていないかなどを探る細胞診の専門家になった。今はがん研有明病院（東京都江東区）の技師長としての仕事の合間を縫って、世界の専門家とメールで議論を重ね、会長の職務を果たす。「日本では最近、4年制大学を出たり医学博士を取ったりする臨床検査技師が増えてきた。そんな若手に、ぜひ世界にも目を向けてほしいですね」

（波多野陽）

（記事抜粋）

小松さんの記事は次の URL から朝日デジタルでご覧頂けます。

<http://www.asahi.com/shimen/articles/TKY201302200622.html>

第 34 回多摩細胞診研究会が行なわれました。

開催日時:2012 年 3 月 24 日(土) 13:00~17:00

(懇親会 17:20~)

会 場:新渡戸文化短期大学 臨床検査学科

プログラム

総合司会 河上 翔(防衛医科大学病理検査部)

13:00~13:35 症例提示

13:35~13:40 開会挨拶

実施委員長：廣井 禎之

13:40~14:30 【教育講演 I】

座長：富永 晋

(防衛医科大学臨床医学講

座)

『尿細胞診の見方』

講師：服部 学

(北里大学医療衛生学部臨床細胞学)

14:30~14:40 【休 憩】

14:40~15:20 【教育講演 II】

座長：廣井 禎之

(防衛医科大学臨床医学講座)

『甲状腺穿刺細胞診-現状と問題点-』

講師：深町 茂

(公立福生病院臨床検査

科)

15:20～15:35 【休 憩】

15:35～15:55 【総 会】

多摩細胞診研究会

会長：蛇沢 晶

15:55～16:55 【症例検討】

座長：田中 健次

(所沢市民医療センター検査科)

『症例1』渋谷 康雄

(国立がん研究センター中央病院)

『症例2』横道 佑佳

(国家公務員共済組合連合会立川病院 病理科)

『症例3』渡部 顕章

(東京医科大学病院)

『症例4』中島 研

(東京慈恵会医科大学付属柏病院)

16:55～17:00 【閉会の辞】

17:20～ 【懇親会】

第34回多摩細胞診研究会抄録

『症例1』渋谷 康雄

(国立がん研究センター中央病院)

【症例】50歳代、男性。既往歴および家族歴に特記事項なし。検診で胸部異常影を指摘され、CTにて肺癌が疑われた為、当院を紹介され、右肺下葉切除術が施行された。

【材料】迅速時の腫瘍捺印標本

【細胞像】背景に組織球や無構造の基質様物質が認められ(Fig 1)、核偏在性で粗顆粒状の核クロマチンが著明に増量し、幅広いライトグリーン好染の胞体を有する異型細胞が上皮様集塊状あるいは弧在性に多数出現していた。これらの異型細胞には、核内封入体(Fig 2)や細胞質内空胞(Fig 3)、二核化したものが見られた。また大型な異型細胞も散見された。

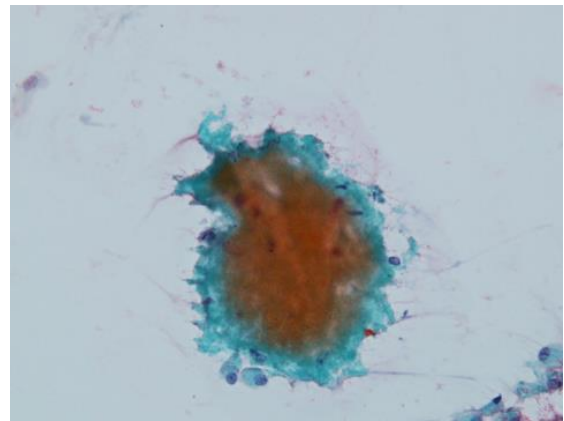


Fig 1

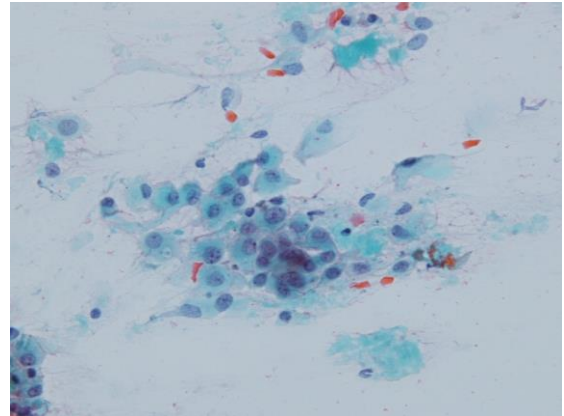


Fig 2

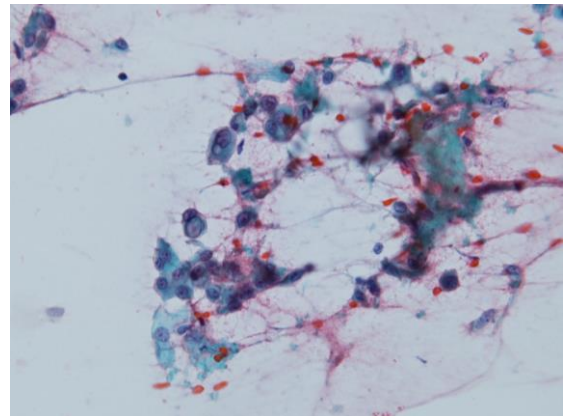


Fig 3

【組織診断】組織学的に腫瘍は、好酸性胞体と核小体の明瞭な類円形腫大核を有する腫瘍細胞が、胞巣状～索状に増殖しながら血管周囲を取り巻く像が主体であり(Fig 4)、核内封入体や細胞質内空胞も認める(Fig 5)。また核分裂像も散見され、腫瘍胞巣周囲では硝子化や壊死とともに粘液様間質が形成されている。免疫組織化学的には血管内皮マーカーであるCD31が陽性であり、肺類上皮血管内皮腫と診断された。

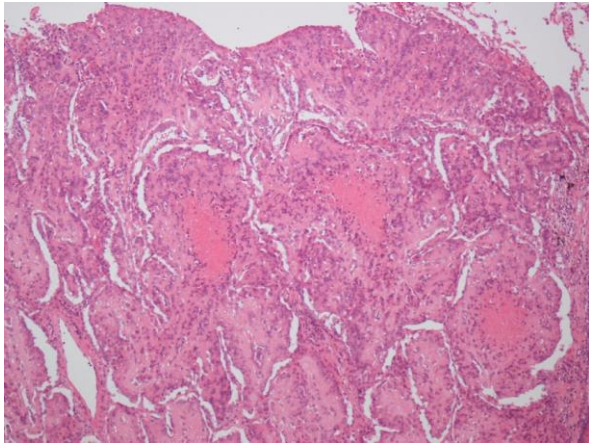


Fig 4

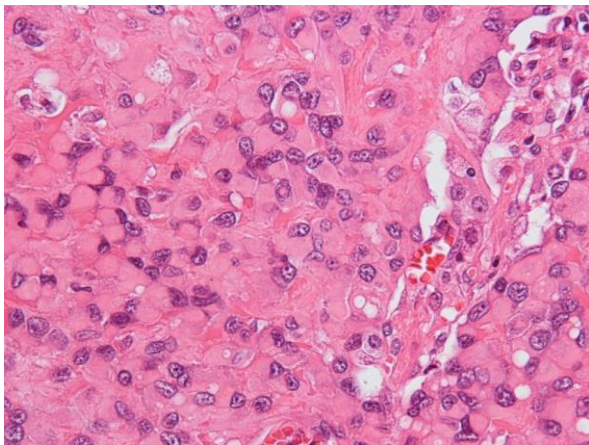


Fig 5

【まとめ】細胞像においては、いわゆる典型的な PEH の特徴的所見とされている①上皮様の細胞集塊の出現、②胞体内に ICL 様から印環細胞様の様々な空胞を有する細胞の出現、③皺や核内細胞質封入体の見られる核を有する細胞の出現、④硝子様の間質の出現等の所見は本症例でも認められた。

鑑別の必要がある腫瘍として、核皺や核内細胞質封入体といった所見の目立つ原発性肺腺癌や悪性黒色腫、甲状腺癌の転移等が、細胞質空胞の見られるものとして血管肉腫や印環細胞癌、乳癌の転移等が考えられるが、いずれにおいても上記①～④の全ての所見を有するものは少なく、臨床所見を合わせて検討することで細胞診での推定診断はある程度可能であると考えられる。

『症例 2』呼吸器：横道 佑佳

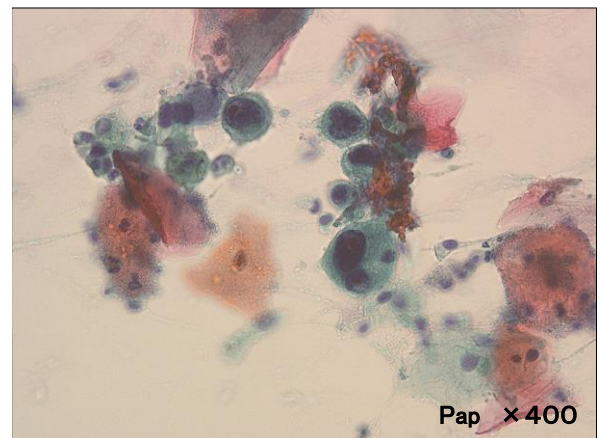
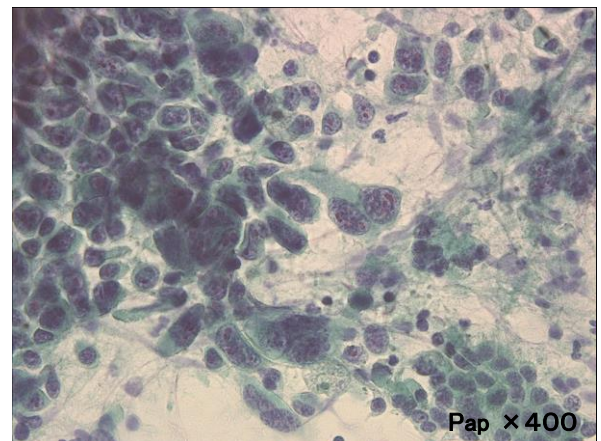
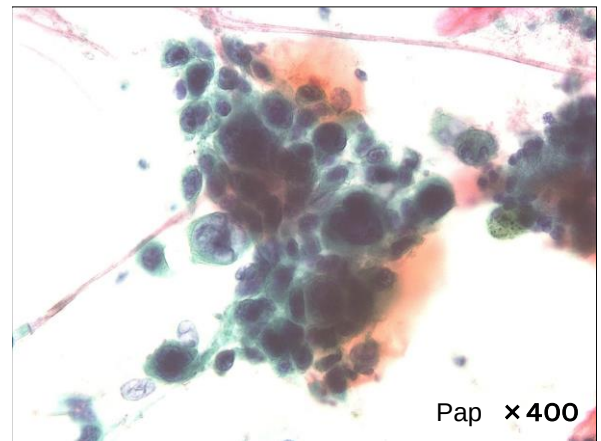
(国家公務員共済組合連合会立川病院 病理科)

[症例] 73 歳、男性

材料:気管支洗浄液

既往歴:45 歳時：虫垂炎、59 歳時：胃癌。急激な体力低下、書字困難を認め、当院内科受診。頭部 CT で多発性円形病変を認め精査目的で入院。入院後胸部 Xp にて左中肺野に約 4cm の円形腫瘍を認め、TBLB を行い同時に気管支洗浄液が提出された。

[細胞所見]壊死性背景に、細胞接着性に乏しい上皮様結合を伴って出現。細胞の大きさは大型で、多形性。核は概して大型で大小不同、多形性に富み、多核巨細胞もみられる。複数の核小体を有しクロマチン増量した異型細胞が多数出現していた。



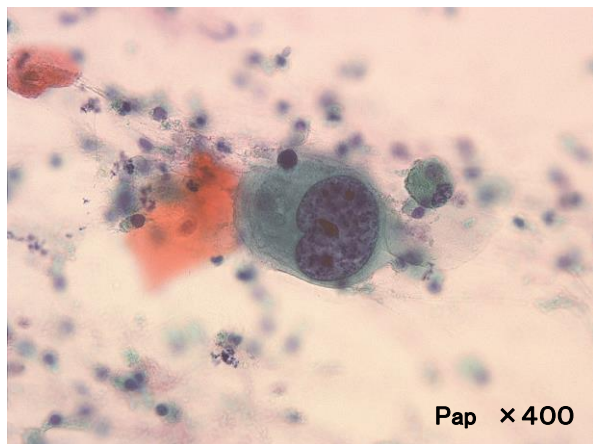
『症例3』 渡部 顕章

(東京医科大学病院 病理診断部)

症例 50 歳代 男性

数年前から右耳下腺に 4×3cm 大の腫瘤を自覚 術中迅速時の捺印細胞診を提示いたします。

細胞診 提示スライド

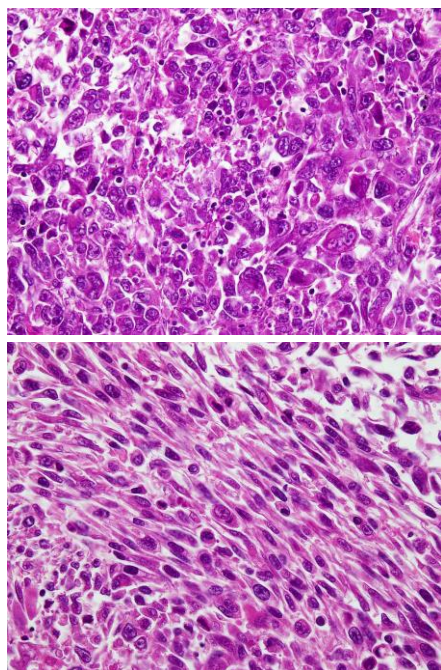


[剖検組織診断／所見]

Pleomorphic carcinoma(多形癌)

組織では細胞診検体でみられる壊死性背景に低倍率でもわかる巨細胞がみられます。多角細胞や核形不整も認めます。また、細胞診検体ではみられなかった紡錘形の異型細胞も多数出現しています。免疫染色では CK AE1/AE3(+), CK CAM5.2(+), TTF-1 (-) でした。

[考察] 今回の症例を通し、多形癌は予後不良の悪性腫瘍であり、細胞診のみで確定診断に至るのは難しいが、巨細胞（や紡錘形細胞）など多形性に富む異型細胞がみられた場合、多形癌の可能性を考慮する必要がある。また、細胞診検体に、本例のように紡錘形細胞が含まれない場合が稀ではない。



巨細胞や紡錘形細胞 (H&E stain)

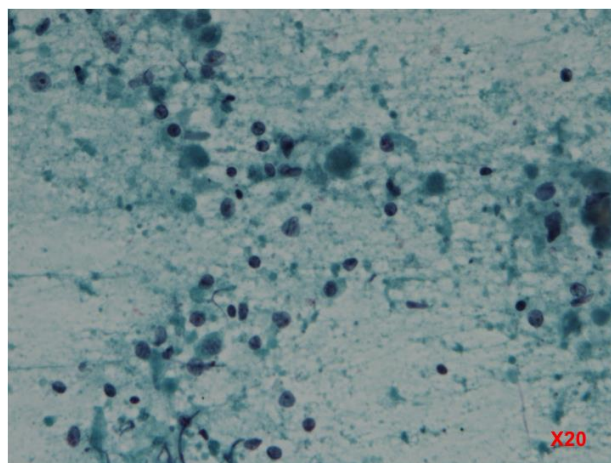


Photo1 壊死性背景に、裸核状の腫瘍細胞が認められます。

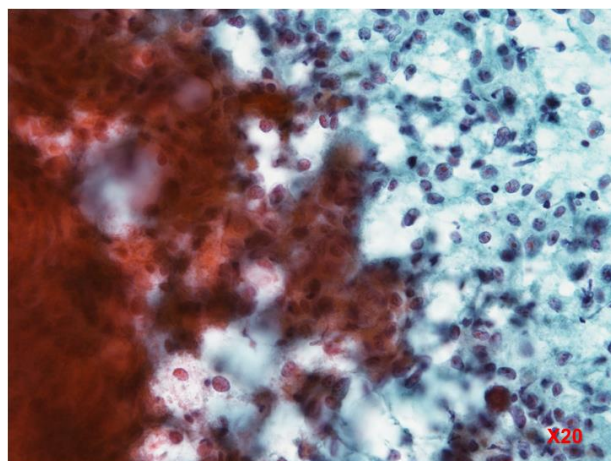


Photo2 重積性または乳頭状集塊が見られます。

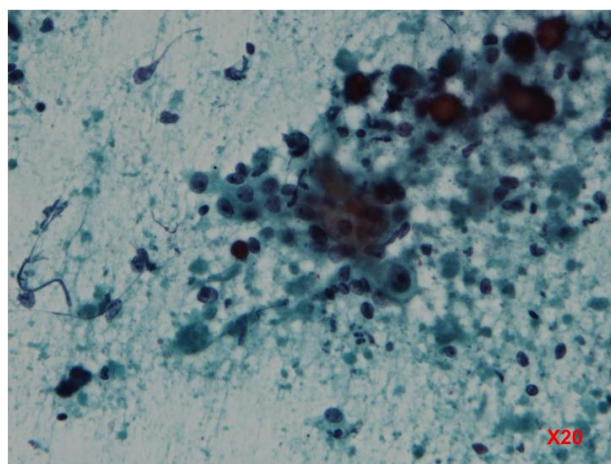


Photo3 壊死性背景に、軽度重積性集塊として腫瘍細胞が観察される。

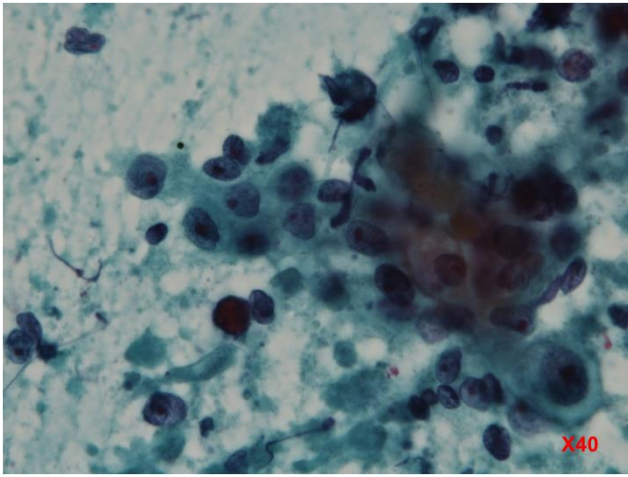


Photo4 著明な核小体、細胞質は豊富ライトグリーン好性顆粒状を呈する。

選択肢

- 1 腺様嚢胞癌
- 2 Warthin 腫瘍
- 3 唾液腺導管癌
- 4 多形低悪性度腺癌(PLGA)
- 5 転移性腫瘍(腺癌の転移)

解答 3 唾液腺導管癌

細胞所見 壊死性背景に、不規則な重積性集塊として観察され、クロマチン増量、核形不整、著明な核小体を認める。細胞質は豊富でライトグリーン好性顆粒状を呈する。

組織所見

胞巣状、乳頭状、篩状の増殖を示し、特徴的な Roman-bridge や充実性胞巣には面疱壊死 (comedo necrosis) など乳癌の面疱癌 (comedo carcinoma) に類似した像を呈する。また、神経周囲浸潤や脈管侵襲も多くの症例で見られる。腫瘍細胞は豊富な顆粒状の胞体を有し、核異型やクロマチン増量を認める。

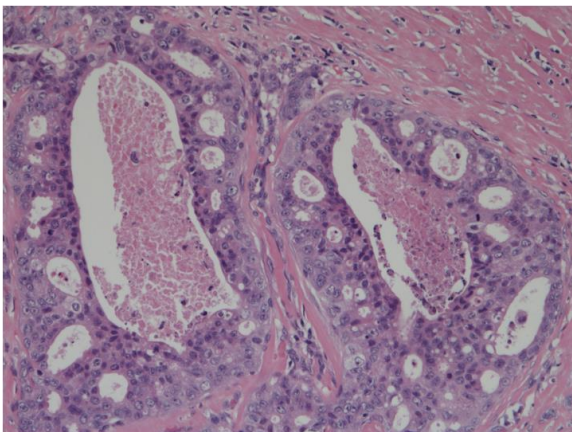


Photo5 胞巣中心部に comedo necrosis を認める。

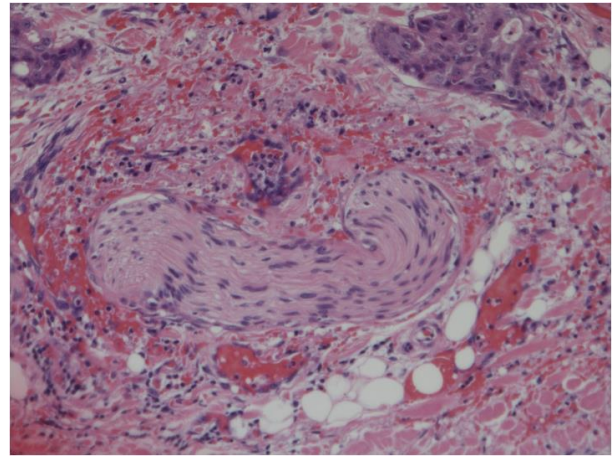


Photo6 神経周囲浸潤が見られる。

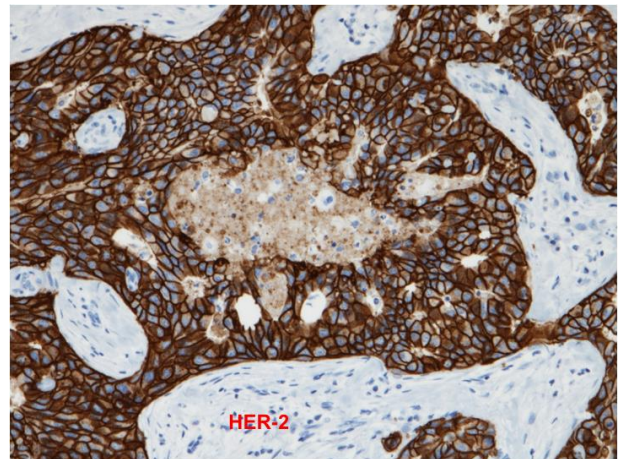


Photo7 腫瘍細胞の細胞質の辺縁に一致して Her-2 の発現を認める。

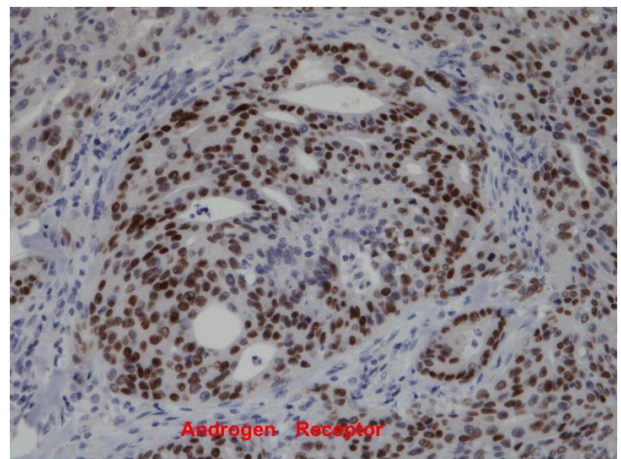


Photo8 腫瘍細胞の核に一致してアンドロゲンレセプターの発現を認める。

まとめ

唾液腺導管癌は、50 歳以上の男性に多く大唾液腺(特に耳下腺)に好発する。全唾液腺腫瘍の 1~2%ほどとされる稀な唾液腺腫瘍で、急速に増大する腫瘤として現れ、顔面神経麻痺や疼痛を伴う事が多い。局所再発、リンパ節転移や遠隔転移を起こし、一般的

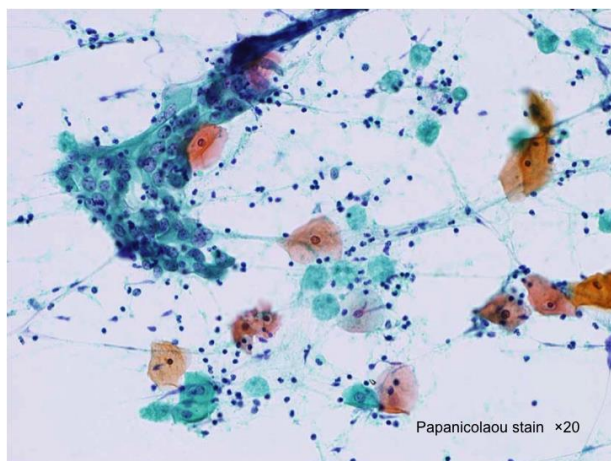
には予後不良である。組織学的には、胞巣状、乳頭状、篩状の増殖を示し、特徴的な Roman-bridge や充実性胞 巣には面疱壊死(comedo necrosis) など乳癌の面疱癌 (comedo carcinoma) に類似した像 を呈するのが一般的な唾液腺導管癌として認識される。亜型としては、多数の肉腫様紡錘形細胞や多形細胞をみる sarcomatoid、多量の粘液産生 を伴う mucin-rich、浸潤部に小型乳頭状胞巣をみる invasive micropapillary などがある。

『症例 4』 婦人科：中島 研

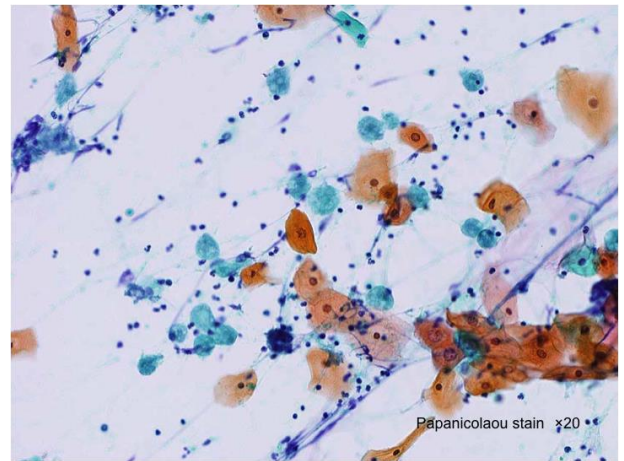
(東京慈恵会医科大学附属柏病院 病院病理部)

症例は、黄色帯下を主訴に来院された 33 歳女性の子宮腔部擦過標本。

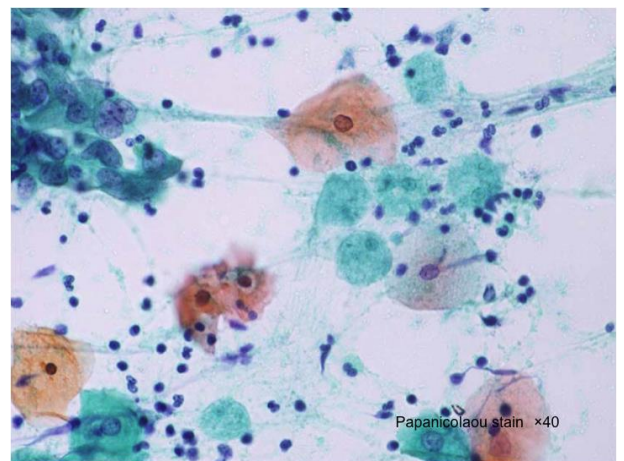
著明な炎症性の背景に、再生上皮細胞やオレンジ G 好染性に変性した扁平上皮細胞が出現していた (写真 1, 2)。その中に傍基底細胞大のライトグリーンに淡染する類円形物質が多数観察された。これを強拡大で観察すると、内部に円形の核が有りその中央には小型の核小体が認められた (写真 3)。また、さらに強拡大にすると赤血球の取り込みが観察された (写真 4)。これらの所見よりアメーバ赤痢の感染が疑われた。同日に採取された子宮頸部の生検組織検体において PAS 反応陽性を示す同様の所見が認められ、アメーバ赤痢感染による頸管炎と診断された (写真 5)。



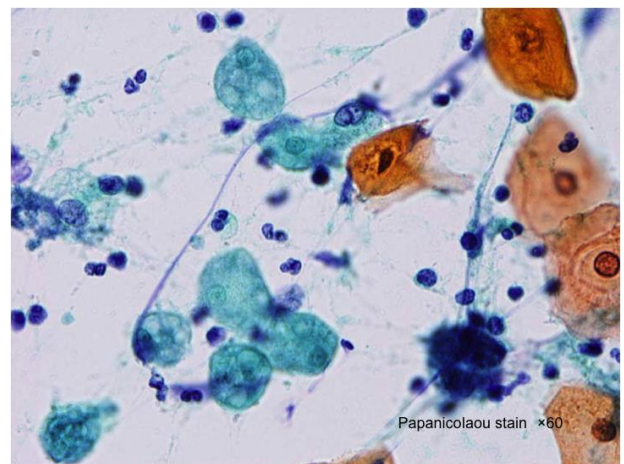
(写真 1)



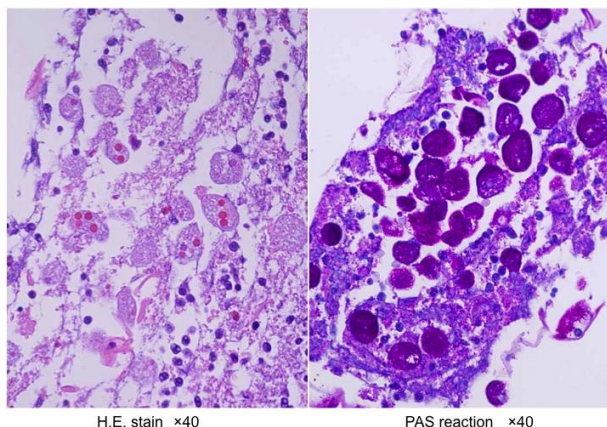
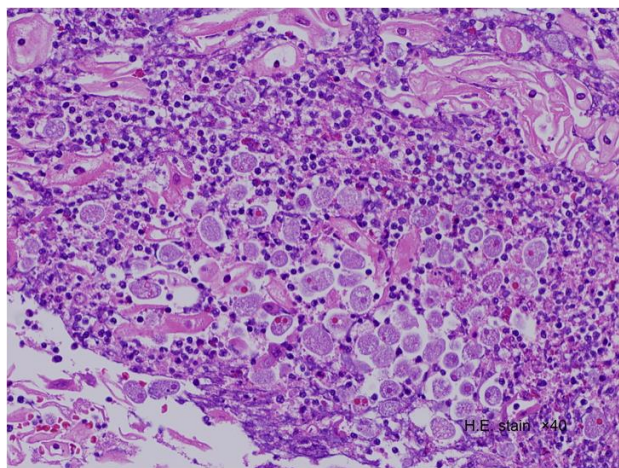
(写真 2)



(写真 3)



(写真 4)



(写真 5)

近年先進国ではアメーバ赤痢感染者の増加が見られ、問題視されている。性的接触や経口感染によるものがあり、特に男性における同性間性的接触を原因とするケースが増えている。併せて、症例数は少ないが、性的接触による女性の感染者が増加している。また、赤痢アメーバ患者の多くが他の性感染症（梅毒、HIV 感染症、B 型肝炎、性器ヘルペスなど）を合併しているとの報告がなされている。今回、子宮腔部綿棒擦過検体により診断しえたアメーバ赤痢症例を報告した。婦人科検体においても赤痢アメーバ感染の可能性を考慮する必要があり、赤痢アメーバの同定は Papanicolaou 染色でも十分可能である。

第 35 回多摩細胞診研究会が行なわれました。

開催日時:2012 年 11 月 17 日(土) 13:00~18:05

懇親会(上野さんを囲む会)19:00~

会 場:国家公務員共済組合連合会 立川病院

講堂

プログラム

13:00~14:00 症例提示 閲覧・鏡検

14:00~14:05 開会の辞

実施委員長:笹井 伸哉

(国家公務員共済組合連合会立川病院)

13: 00 ~ 14 : 00 症例提示 鏡検

14: 00 ~ 14 : 05 開会挨拶

実施委員長 笹井 伸哉

(国家公務員共済組合連合会立川病院)

14 : 05 ~ 14 : 50 【教育講演 I】

座長 笹井 伸哉

(国家公務員共済組合連合会立川病院)

『チェルノブイリ事故後の甲状腺がん検診に参加して』 講師: 渡會 泰彦(日本医科大学 病理部)

14 : 50 ~ 15 : 20 【特別講演 I】

座長 蛇沢 晶(国立病院機構東京病院)

『細胞診の固定と染色の物理化学』

講師:大村 剛(東邦大学医療センター 産婦人科)

15 : 20 ~ 15 : 35 休憩

15 : 35 ~ 15 : 50 総会

多摩細胞診研究会 会長 蛇沢 晶

(国立病院機構東京病院)

15 : 50 ~ 16 : 35 【教育講演 II】

座長 布村 眞季(立川相互病院)

『妊婦からみた細胞診異常と性感染症』

ー細胞検査士に期待することー

講師:丸橋 和子(立川相互病院 産婦人科)

16 : 35 ~ 16 : 55 【特別講演 II】

座長 笹井 伸哉

(国家公務員共済組合連合会立川病院)

『検査室の環境改善のご提案』

ーキシレン規制に関わるキシレン代替品の有用性についてー 講師:細田和孝(株式会社ファルマ)

16:55 ~ 18:00 【症例検討】

座長 藤山 淳三(杏林大学付属病院病理

部)

症例提示 (3 題)

18:00 ~ 18:05 【閉会挨拶】

多摩細胞診研究会 事務局長 布村 眞季

19:00 ~ 21:00 懇親会

(上野 喜三郎さんを囲む会:立川グランドホテル)

第 35 回多摩細胞診研究会抄録

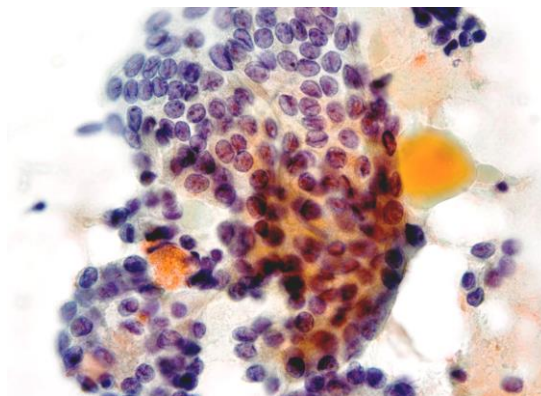
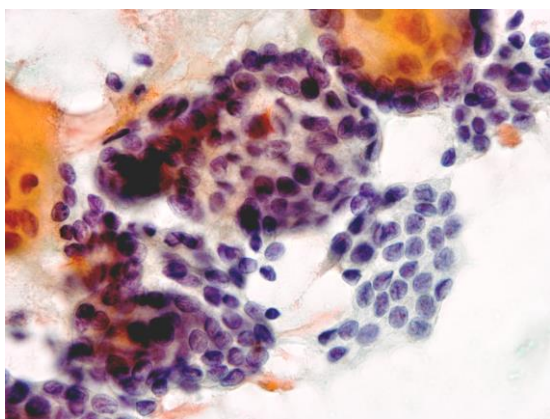
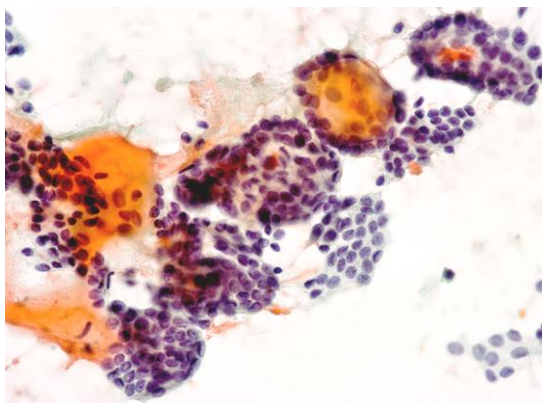
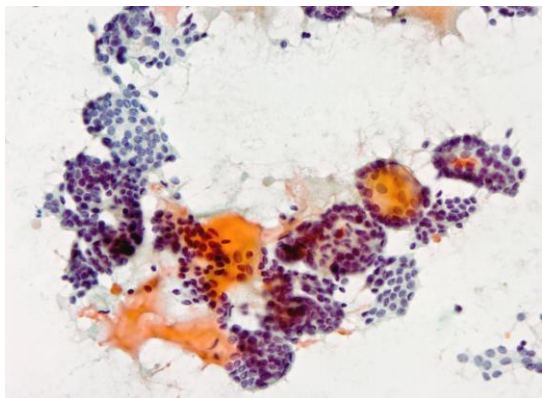
『症例 1』甲状腺:高橋 真帆

(伊藤病院 臨床検査室)

[症例] 39 歳、女性

材料: 甲状腺 FNA

甲状腺右葉に 10.4×11.0mm の Ring 状 calc の nodule
imp) PTC not R/O



Question

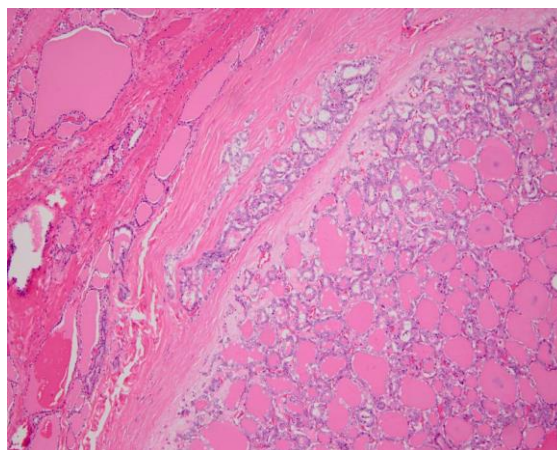
この症例をみて何を疑いますか？

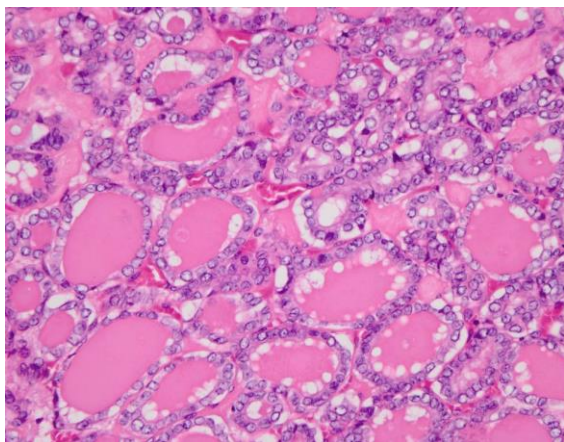
- ① 腺腫様甲状腺腫
- ② 濾胞性腫瘍
- ③ 乳頭癌

マクロ像



H&E 像





Papillary carcinoma, follicular variant

(乳頭癌 濾胞型亜型)

まとめ『乳頭癌 濾胞型亜型』

1. 乳頭癌濾胞型亜型は、超音波画像では良性結節の像と類似することが多いため、術前診断には細胞診検査が非常に有用である。

2. 明らかな乳頭状構造や核内細胞質封入体が認められない場合、細胞集塊や核の詳細観察が重要である。

『症例2』呼吸器：萩原 範子

(東海大学医学部附属八王子病院中央臨床検査科病理)

症 例：60歳代 女性

既往歴：特記事項無し

現病歴：頭痛を主訴に近医受診。CT 検査において頭部と胸部に腫瘍陰影が認められ、精査目的で当院を紹介受診となった。右上葉 B2 領域に 3.5cm 大の腫瘍が認められ、気管支鏡検査が施行された。

材 料：気管支擦過

細胞所見：

壊死物質を背景に、核腫大し淡い細胞質を有する異型細胞が腺管状または柵状を呈し小集塊で観察された。また、一部には、N/C 比が高く粗顆粒状のクロマチンを有する散在性異型細胞が観察された。これらの異型細胞はクロマチンの性状が異なるものの、柵状配列を呈する部分もみられたことから、低分化成分を有する腺癌が疑われた。(Photo1,2)

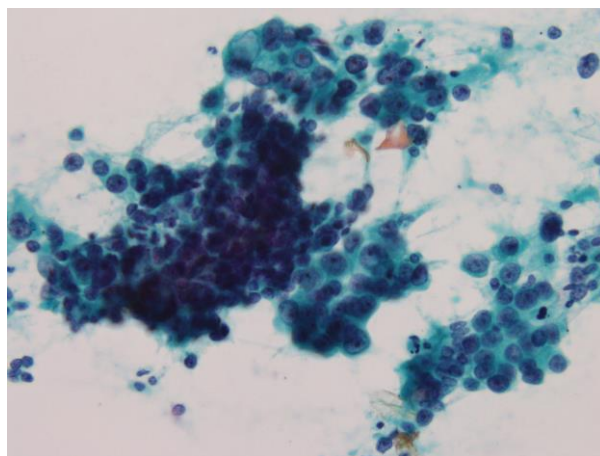


Photo1 (Pap. staining x40)

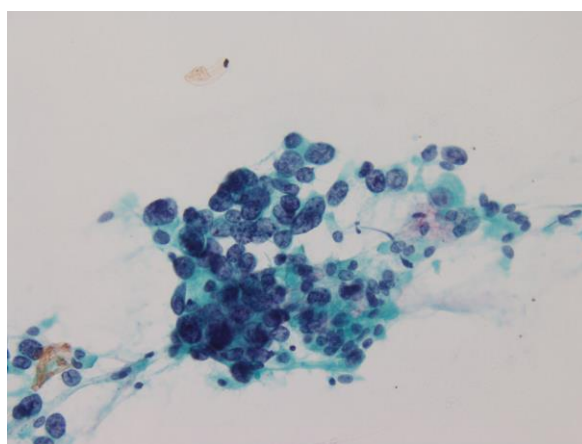


Photo2 (Pap. staining x40)

組織学的所見：

腫瘍部には広範な壊死が認められ、腺腔形成を呈し増殖する腺癌成分と辺縁に柵状配列を伴い包巣状に増殖する腫瘍細胞が認められた。(Photo3)

免疫化学染色で包巣状を呈する部分は TTF-1(+), Synapto-P(+), CD56(+) であった。(Photo:4) 以上の所見より、腺癌と神経内分泌癌が混在する混合型大細胞神経内分泌癌(Combined LCNEC)と診断された。

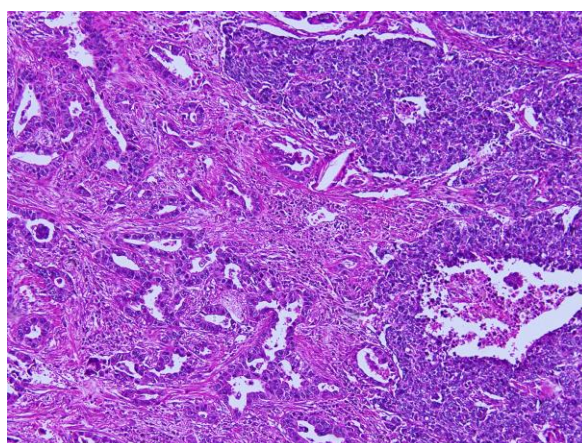


Photo3 (H.E.staining,x10)

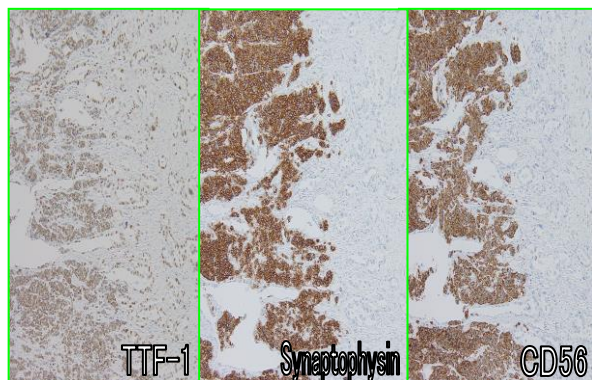


Photo4 (Immunohistochemical.staining,x10)

まとめ：

本腫瘍は、LCNEC の混在により治療・予後は大きく変わる為、細胞診で診断する価値は高い。また、LCNEC の約 10%は他の癌と混在することから、診断

する際、他の腫瘍成分の存在を考慮すべきである。腺癌と LCNEC の細胞像は柵状構造などの所見が類似するため細胞配列や核クロマチンの違いが Combined LCNEC の鑑別に有用と考えた。

考察：

腺癌を疑う症例に、裸核様細胞や粗顆粒状クロマチンを有する異型細胞が観察された場合、Combined LCNEC の存在も念頭に置くことが重要と考えられた。

『症例3』子宮体部：星野 彩子

(東京医科大学八王子医療センター)

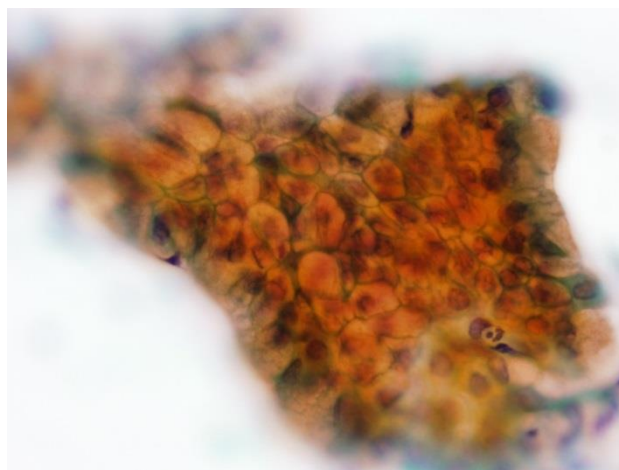
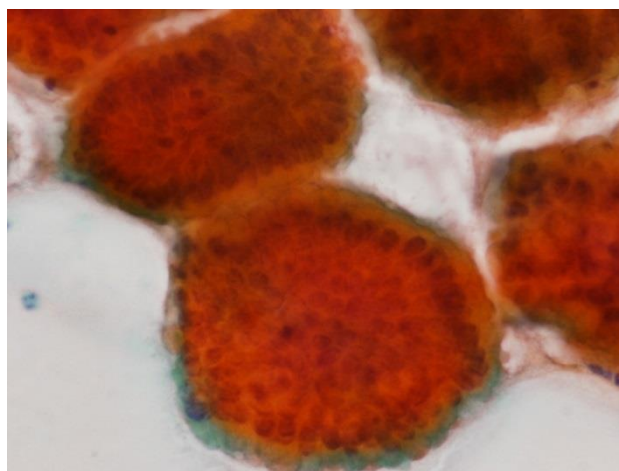
“Papillary Proliferation of the endometrium” が見られた内膜ポリープの一例

【はじめに】子宮体部に生じる内膜ポリープは通常、内膜腺と間質の増生から構成される良性隆起性病変である。今回、内膜ポリープに生じた粘液化生上皮からなる増殖性病変が細胞診で腺癌と非常に鑑別しにくく悪性を強く疑った症例を経験したので報告します。

【症例】56歳女性、数年前当院にて子宮頸部ポリープの切除歴がある。近医にて子宮筋腫および子宮体癌による内膜肥厚が疑われ紹介受診となった。子宮内膜細胞診と内膜生検が行われ、悪性の診断となり拡大子宮全摘出術および両側付属器切除術が行われた。

【細胞像】粘液性背景に、頸管腺類似の異型に乏しい粘液産生性細胞を小塊で多数認めた。集塊は球状あるいは間質を伴った短い樹枝状・乳頭状として認められ

ることから粘液産生性上皮細胞の増殖性病変を示唆する所見だった。細胞塗抹面の一部から採取した組織片で作製したセルブロックのHE標本でも同様の所見を認めた。これらの所見は内膜原発の粘液性腺癌を疑わせた。



【組織像】セルブロックによるHE標本では細い間質を伴った細胞像同様の粘液産生性上皮細胞の乳頭状集塊を認めた。樹枝状の細長い枝を作り、長さは短いものから長いものまで様々であったが、複雑な分岐は著明ではなかった。内膜生検ではほとんどが血液成分で、上皮成分は極少数認められるのみであった。摘出された子宮には18×12×5mmの内膜ポリープが見られ、その表層にセルブロック標本で見られたものと同様の粘液性乳頭状病変を痕跡的に僅かに認めるのみだった。

【考察】内膜ポリープの表層に生じた粘液性乳頭状病変が粘液性腺癌に類似した症例を経験した。粘液性変化の見られた Papillary proliferation of the endometrium (PPE) と考えられた症例だが、細胞像では悪性を疑う所見が多く、これらの鑑別は困難なことがあると考えられた。

編集後記

会報 18 号をお届けします。東日本大震災から 2 年が経ちました。東北の復興はあまり進んでいないようです。住み慣れたふるさとを諦めて移住する方も少なくない様です。もう一度、自分たちができる支援を考えてみましょう。

第 35 回多摩細胞診研究会終了後、立川グランドホテルに於いて上野喜三郎さんを囲む会が開催されました。上野さんは多摩細胞診研究会発足時より会運営にご尽力を頂きました。研究会、研究会ゴルフ部より記念品の贈呈がありました。70 名を超える参加者で盛会のうちにお開きとなりました。参加者の皆様ありがとうございました。

東京都細胞検査士会副会長の小松京子さんが、アジアで初めて『国際臨床検査技師連盟会長』に就任されました。私たちと同じ細胞検査士の記事が新聞に掲載されることは世の中に細胞検査士を知ってもらうよい機会となりました。(記事中に細胞検査士の名称が記載されていなかったのがちょっと残念ですが)

来年、台湾で国際臨床検査技師学会が開催されます。日本からも参加ツアーを企画するそうです。皆さん台湾に行きましょう。

研究会ではゴルフコンペを定期的で開催されています。若い方が参加しやすいように参加費を抑えています。是非ご参加下さい。事務局では、作業軽減、事務通信費の削減の為、ホームページや E-mail を利用して研究会開催・イベント情報等のお知らせを配信する準備をしています。出来るだけ E-mail でのご案内が出来るよう皆様のご協力をお願いします。

平成 25 年 3 月 笹井 伸哉